

昭和 10 年代における地方文化（運動）言説 ——文学（者）を軸として

松 本 和 也

要旨：本稿では、昭和 10 年代（1935～1944）における地方文化（運動）を主題とした言説を、特に文学言説を軸として分析・考察した。Ⅱでは、地方主義文学や故郷・郷土を語る文学言説を通じて「地方（文化）」という概念が注目されていた様相を確認する。Ⅲでは、昭和 15 年の日本文化論の再評価と連動して展開された地方文化言説について、再燃していく地方文学を中心に検証した。この時期、「地方」には、内地の周辺部と外地の日本が含まれていた。Ⅳでは、大政翼賛会文化部が主導した地方文化運動に注目し、文化部メンバーの発言や地方での受容などを分析した。この時期には、国民文化＝地方文化を大東亜文化、世界文化へと展開していく回路も言説化されていった。太平洋戦争開戦後を扱うⅤ・Ⅵでは、疎開も含めて、地方文化（運動）が「戦力」として位置づけられていく地方文化言説を検証した。ここで地方文化言説は、文化と生活とが「戦力」において一体化する帰結を迎える。

キーワード：地方文化運動、地方主義文学、大政翼賛会文化部、疎開、岸田國士

I

昭和 10 年代における地方文化（運動）は時局に即してその意義を変じつつも持続的に議論され、戦後の文化活動の基盤ともなった⁽¹⁾。本稿ではまず、次に引く事典記述「地方文化運動」から検討する。

大政翼賛運動の一環として展開された文化運動。地方文化団体による文化運動は、一九二〇年代から地方都市を中心にみられたが、昭和恐慌以降、地方・農村の生活・文化環境はきびしく、日中戦争下の国民精神総動員運動においては娯楽・芸能を含む地域文化活動は抑圧される傾向にあり、地方文化人らによって地方文化の危機が訴えられた。これに呼応して、四〇年十月に設立された大政翼賛会の文化部は、「地方文化新建設の理念と当面の方策」を作成した。文化部長岸田國士らは、日本文化の伝統は中央文化よりも地方文化の中にあるとして、各地を回って文化団体の結成と文化運動の推進を呼びかけた。これに呼応して、中小都市の文化人を中心にして地方文化団体が結成され、団体数は四四年一月までに四百余りに及んだ。地方文化運動には、「郷土の偉人」や「先覚烈士」顕彰に力を入れる精神主義的運動、農村医療や生活改善、および娯楽・芸能の振興に力を注ぐ運動があった。⁽²⁾

上の記述では、中央（都会）との対比において地方（農村）が主題化され、地方文化組織を拠点とした地方の再発見や地方への娯楽の提供などが、地方文化運動の主な活動とされており、昭和 10 年代における地方文化（運動）の要点が凝縮されている。しかもそれは、単に地方における文化運動にとどまらず、《さまざまな伝統文化・郷土文化は主に日本主義イデオロギーの周縁部に連なるもの》⁽³⁾として、アジア・太平洋戦争と連動する局面も多く、それゆえ戦後において批判対象とされた。それでも、地方

文化（運動）は大政翼賛会文化部がリードした文化運動に限定されるものではなく、《イデオロギー論的観点からとらえる限り、戦時下の地方文化運動はすべて同質的なものに映るかもしれないが、地域文化の流れに視線を注ぐとき、それは異なった相貌を呈してくる》⁽⁴⁾。こうした観点に即して、北河賢三は《戦時期の文化についての研究は進展しはじめており、資料集の刊行によって研究条件は整いつつあるが、それらをふまえて、さらに戦時期の文化状況と文化運動に立ち入って検討を加える必要があろう》⁽⁵⁾と述べている。事実、各地の地方文化（運動）や個別のテーマについては、具体的な事例（の検証）が蓄積されつつある⁽⁶⁾。

以上の先行研究をふまえ、本稿では個別の事例研究ではなく、イデオロギー・政策と文化運動の結節点として、双方とも連動して産出される昭和10年代に地方文化（運動）を主題とした言説に照準をあわせた調査・分析を行う。そのことで、地方文化言説の諸相を考察することが本稿のねらいである。

II

広義の地方⁽⁷⁾を主題とした小林秀雄「故郷を失った文学——文芸時評——」（『文芸春秋』昭8・5）において、明治35年生の小林秀雄は、《私達が故郷を失った文学を抱いた、青春を失った青年達である事に間違いはないが、又私達はかういふ代償を払って、今日やつと西洋文学の伝統的性格を歪曲する事なく理解しはじめた》（190頁）と言表していた。このように、言説上において地方文化（運動）という主題は、日本文化／西洋文化の再編成とも連動する。ここで、見通しを示しておけば、昭和10年後をピークとする西洋文化の地位⁽⁸⁾はその後低下し、昭和10年代中葉における伝統的な日本文化の再発見・評価を経て、戦争末期には米英撃滅というスローガンが広言されていくようになる。

翻ってみれば、文学（者）にとって地方とは、農民（農村）文学を代表とするプロレタリア文学のほか、出身地に関わるエッセイのモチーフとして、ことさら地方文化（故郷）を標榜せずとも、ごく身近なものであった。無署名「記者便り」に《郷土風景を描いていただきました》、《郷愁をおぼえることでせう》（215頁）と綴られた特集「わが郷土の地方色」（『新潮』昭8・6）には、結城哀草果「山と雪の国（山形）」、上林暁「僕の村（土佐）」、伊藤整「非日本的なもの（北海道）」、福田清人「九州長崎のあたり（長崎）」、瀧井孝作「楳・ハル木（飛騨）」、武田麟太郎「君死にたまふことなかれ（堺）」が並び、いずれも2ページ程度のエッセイ、書き手の出身地に関する思い出が綴られている。翌年の特集「地方文化を観る」（『文化集団』昭9・10）には、淡谷悠蔵「青森県の文化展望——障子の破れをつくらつたローザ——」、香川新七「移住民と熊——北海道の文化——」、妻草之介「『じやこうしか』文化——樺太を観る——」、朴勝極「『農楽』と蓄音機——朝鮮の文化——」、村上幸夫「二十分休みの『新聞』——金属工場から——」、北村忠三「北九州坑夫の生活」、壺井榮「小豆島から」、江口渙「佐渡ヶ島」が並ぶ。

また、昭和9年に話題となった地方主義文学に関しては、特集「都会文学と地方主義文学に就て」（『新潮』昭9・10）がある。川端康成が「都会と田舎——都会文学の立場より——」において《石坂洋次郎氏や、荒木巍氏や、大谷藤子氏や、張赫宙氏や、その他強さを持つて現れて来た作家達は、田舎を描いてゐることが多いやうだ》（33頁）と指摘したように、地方をモチーフとした創作の増加をふまえ、都会文学との対比が折りこまれた特集である。新居格は「都会文学への警告——都会文学の立場より——」において、《我が国に於いて地方主義文学が存在事由をもつとすれば、それは先づ都会文学にたいする対立となるが、それだけでは足りない》と考え、《これから我が国に生れる地方主義文学》の急所を《第一に地方の特殊性を十分にもつことであり、第二に、その特殊に深く根ざすところの地方精神があるべき》（25頁）だと言表していた。同様に、中村星湖も「農村小説は氾濫してゐるか——地方主義文学の立場より——」で《「地方主義文学」》について、《「都会文学」に対抗する意味を持つた文学とし

て、地方人の作家に依つて、地方的の材料を以て、地方主義的意識で作られた作品》(27 頁)だと定義し、深く地方に根ざしているか否かを地方主義文学の急所とみていた。後に『大日向村』(朝日新聞社、昭 14)を著す和田傳は「土着文学論——地方的文学の立場より——」で、《地方を描くためには土着しなければだめだといふ僕の土着文学論は、従つて、その土着した地方を足がかりに、地方的でない普遍的真實すなはち人生や社会や世界や宇宙を認識し、表現する文学の謂》(36 頁)だと言明していた。同誌次号には亀井勝一郎「地方主義文学と作家の意欲」(『新潮』昭 9・11)が掲載され、前後する時期の農民文学について、《農民の日常生活に自己を同化し、その些末な生活現象までを地道に描かうとする努力が一方にあり、他方、政治的退潮の根源を反省的にみきはめようとする作品傾向がある》と整理する亀井は、《この双方を非常に大きなスケールの下に概括し、更に積極的なものを求めようとした本格的な農民小説があらはれはじめてゐる》ことに注目し、具体的に《平田小六の「囚はれた大地」や佐々木一夫の諸作など》をあげ、こうした農民文学の実践に、何かしら《更に積極的なもの》(49 頁)を見出していた。同時期に「新地方主義小説論」(『行動』昭 9・10)を書いた春山行夫も、《石坂洋次郎氏や張赫宙氏のやうな地方在住の作家が現れ出てゐることや、『改造』の懸賞小説に酒井龍輔氏の「油麻藤の花」のやうなモダニズムとプロレタリア文学の対立した時期であつたら、恐らく今日の文学の一傾向を示す作品とはならなかつたであらうと思はれる地方主義的な作品が選ばれたこと》に注目し、そこに《なんらかの原因》(24 頁)をみている。犬田卯は「地方主義文学の問題」(『行動』昭 9・12)を《農村・農民の生活に取材せる作品が珍らしくもジャーナリズムの採用するところとなつて、一部の人々はそれに地方主義文学なる名称を付与した》(111 頁)と書きおこし、こうした現象に注目しつつも、それらを地方主義文学と呼ぶことを排し、《未来を約束する農民文学への過渡的な現象》(117 頁)だとみていた。

してみれば、さしあたり広義の地方に関わる作家・作品が顕在化したことをうけて、ジャーナリズム上では地方主義文学という標語が目立ったものの、その内実について、対象を共有した上で議論が戦わされていたわけではなかった。それでも、農民文学ではなく地方主義文学という標語によって、地方という主題が前景化されていた様相は確認できる。

その後、昭和 10~12 年までの 3 年間、地方文化という論題は影を潜める。その間、三木清に「一日一題 地方と文化」(『読売新聞』昭 11・5・13 夕)がある。《芝居、音楽、美術、その他学校、出版、等々、殆どすべて東京に集中し、この都会と地方の都市との懸隔は甚だしい》という三木が問題にするのは、《我が国の文化は東京に集中してゐる》ことと、それゆえ《それぞれの地方に特色のある文化が発達してゐないために、現代日本の文化は多様性に乏しく豊富さを欠いてゐる》ことである。さらに三木は、《我が国》において《文化が絶えず流行の暴威に委ねられてゐる》こと、《新しい文化の成熟が困難にされてゐる》こと、《文化上の自由が少い》ことの原因として、《地方に文化が発達してゐないこと》をあげ、《今日世界的画一主義に対して日本の独自性を自覚することが必要であるとすれば、我々はもつと手近に日本の内部における画一主義の打破について考ふべきではないか》(1 面)と提言していた。ここで三木は、地方文化(の多様性)を育てることが日本(文化)の《独自性》に寄与すると考えており、こうした発想は、昭和 10 年代半ば以降展開されていく大政翼賛会文化部による地方文化論とも重なる。

ほかに、地方文化を主題とした出版物として、小山書店による新風土記叢書がある⁹⁾。第一編・宇野浩二『大阪』(昭 11)、第二編・佐藤春夫『熊野路』(昭 11)刊行時の広告「小山書店 新風土記叢書」(『東京朝日新聞』昭 11・3・31)には、次の紹介文が読まれる。

日本国土の有する美しいもの善いもの香あるものを、本当に美しいと善いと芳しいと感じ得ることは、現代流行の所謂日本精神の空疎を救つてそれを生きた具体的なものにする唯一の直路である。

然も日本を知るには地方を知らねばならぬ、特殊を滲透した上の全体こそ初めて真の全体である。本叢書は実にこの根本的意図の下に新たな郷土的文学を生まんとする野心を以て企てられた。(1面)

その後、数年の空白をへて、太平洋戦争開戦後に第三編・青野季吉『佐渡』(昭17)、第四編・田畑修一郎『出雲・石見』(昭18)、第五編・中村地平『日向』(昭19)、第七編・太宰治『津軽』(昭19)、第八編・伊藤永之介『秋田』(昭19)とつづく(昭和23年、第六編・稲垣足穂『明石』刊行)。太平洋戦争末期に刊行された『日向』巻末掲載の「新風土記叢書」紹介文は、次のように変化している。

この叢書は、文壇を始め各界のすぐれた方々に、おのが故郷を風韻豊かな風土記に再現して戴き、時代の痼疾に蝕まれて故郷を失うた近代人の胸にふたたび故郷への愛著をよびさまし、なほ進んでは、神のみ手に生みなされた、うまし国たる日本を、あらためて見いださんがためにつくられた。(頁表記なし)

こうして、昭和10年代を通して変化を遂げていく《故郷》の含意は、日本と地方とに相互往還的な回路を維持することによって、ナショナリズムにも近接していく。

和田傳『沃土』(砂子屋書房、昭12)が第一回新潮社文芸賞(第一部)を受賞した昭和13年、再び文壇で地方文学が話題となる。選評「第一部(文芸賞)について」(『新潮』昭13・4)を参照すると、久保田万太郎を除く8名の審査員が『沃土』を推しているが、加藤武雄による次の評言が注目される。

輓近、農民小説の呼び声が少々大きくなつたが、それはマルキシズム文学圏内の声であつたので、マルキシズム文学の潰滅と共に消え去つたかたちである。農民文学は大いに起る可くして起らず、従つて農民小説の作者は長い間兎角冷眼視されてゐたのだが、今、和田君が此の一秀作を提げて、十幾年間の隠忍の裡から躍り出た事は、ひとり和田君の爲めのみならず、農民文学そのものの爲めに、慶賀に堪えないのである。

さらに加藤は、《此の作を以て、長塚節の「土」以来の農民小説とするに憚らない》(101頁)、《近時文壇の一大収穫》(102頁)だと断じて、『沃土』を絶賛している。

この発表をうけて、X・Y・Z「スポット・ライト」(『新潮』昭13・4)には「文学の中央集権」という小見出しが立てられ、《文学の中央集権は、徐々とはあるが、次第に崩れて来つつある》という観察から、次のように地方(文学)の意義が論じられた。

文学者が各地方に分散して、それで結構文学の仕事がつづけられ、その仕事の効果が、直ちに中央に認められるやうな傾向になつて来たことは、それだけ文学者の生活の範囲と視野とを拡げることになると思ふ。それと同時に、文学志望者なども、必ずしも東京ばかりに集つて来る必要がないことになる。(41頁)

こうした動向をうけて、水守亀之助は「地方主義文学雑感」(『三田新聞』昭13・4・15)で、《地方主義文学の使命を都会的な文壇文学に対するアンチ・テーゼとして意義あらしめたい》(5面)と論じて、《都会》と対比した《地方》の意義を積極的に主張していた。

このような地方主義文学(論)が再燃していく言説上の動向は、特集「文学に於ける地方主義」(『早稻田文学』昭13・5)に集約される。犬田卯は「地方主義文学と時代性」において、《我国の地方主義

的傾向の作品——乃至作家は、今日、時代的に非常に苦悩しつゝある》ことを《時代の変調》ゆえと容認しつつも、《やがてわが地方・農村の真実の魂が表現せられ、発表せられる機運もやつて来るであらう》(10頁)という期待を表明していた。実作者の伊藤永之介は「地方主義と地方文学」において、地方文学とは《その地方的特殊性を通じて、社会現実の一般性と普遍性に通ずる文学であるべき》(2頁)だと、その理想を提示する。また、岡澤秀虎は「文学的分進合撃」で、《今までの中央都市文化偏重に抗して、日本国土全体の文化を生かすべきだといふ全体的文化の要求といふ点に力点を置いて、地方文化、文芸の進出なり創造なりに努めなければならない》(12頁)と論じている。この特集内の論文は、いずれも地方という主題を掘り下げた地方文学を、その地方性を通じて日本文化へと一般化していくことを目指していた。

同時期には、三木清・阿部知二・島木健作「鼎談会 文化と自然」(『文学界』昭13・8)もあり、農村(地方)を主題とした島木健作『生活の探求(正・続)』(河出書房、昭12~13)について阿部が、《文学として、地方を描く、或は農村を描く》ことの《重大》さを指摘した上で、《人間の、真に人間らしい姿と生活を探求して行つた時に、都会の生活と地方の生活との何れが多く、の真実を含むか》(213頁)と問題提起をしていた。

さらに、文芸誌上では『文芸』が「私の風土記」欄を設ける。無署名「編輯後記」(『文芸』昭13・2)には、《作家が己れの出身地の風土を叙して、文学的郷土記を作る》、《是れは郷土文学への新しい寄与として貢献するところ多いと信ずる》(231頁)といったねらいが示され、張赫宙「私の風土記——朝鮮」(昭13・2)、井伏鱒二「郷里風土記——広島」(昭13・3)が掲載された。年末からは「地方文化通信」が設けられ、清水英二「地方文化通信(福岡の部)」(昭13・11)、小濱理三郎「地方文化通信(樺太の部)」(昭13・12)、井上淳麿「地方文化通信 京都」(昭14・1)、上田進「地方文化通信 長野県」(昭14・2)、龍瑛宗「地方文化通信 台北市」(昭14・5)、柴田信「地方文化通信 前橋」(昭14・6)、賤機山人「地方文化通信 静岡市」(昭14・7)、加藤勝代「地方文化通信 金沢市」(昭14・8)が並び、前掲「風土記」とあわせて、内地の周辺部のほか、地方都市、朝鮮、樺太、台北までがカバーされていた。

以上、本節で検討した昭和初年代末から昭和14年に、地方文化は時折議論されたにとどまる。それでも、文学に関しては地方(農村)をモチーフとした文学が連綿と書かれ、その隆盛に伴い批評言説も生みだされた。また、出身地や旅行先としての地方・故郷をモチーフとした紀行文やルポルタージュも書かれ、その際、地方という概念には都会と対置された内地の地方と拡張した帝国日本の一部である外地=地方が含まれ、いずれも日本という上位概念に包摂される一地域として位置づけられていった。

Ⅲ

地方文化(運動)を主題とした言説は、皇紀二六〇〇年で祝祭ムードにわいた昭和15年、日本文化論の隆盛と連動しながら新たな転機を迎える。たとえば、この年1月から沖縄方言論争が始まり、10月には大政翼賛会が結成され、岸田國士が文化部長に就任した⁽¹⁰⁾。

中村武羅夫は「文学の地方分散」(『文芸』昭15・6)において、《つい二三年前までは、文学の中心地としては東京のみに、恰も限定されてゐるかのごとき観があつたものが、それがこの頃では地方々々に、次第に分散する兆候を見せ始めて来た》という観察を示し、《大陸文学だとか、農民文学だとか、戦争文学だとか、その他の等々に依つて、文学の中心勢力の固定化が、次第に地方的分散の動きを見せて来てゐた時に、この動きにたいして極めて截然たる決定を与へたものは、火野葦平氏の帰還後の声明と、その行動》(201頁)だと指摘し、同じく帰還作家の上田廣も同様の効果を果たしたと付言した⁽¹¹⁾。また、中村は《地方的に文学の存在が、次第にその勢力を盛上げて来つゝある実状を示して

ある》(203頁)として、満洲文学、朝鮮文学、台湾文学、九州文学、関西文学を例示していた。さらに、中村は「文学と地方語及び地方文化」(『新潮』昭15・6)では、《その題材や、会話などに依つて、地方的特色が十分に表現されることに依つて、その作品のすぐれた価値をなしてゐるやうな作品も、相当に現はれてゐる》として、《地方々々の土語》が、《その作品の価値を高める上に素晴らしい効果を挙げてゐる》(35頁)と指摘し、《地方文化と地方語との問題は、単に或る地域を限つて、その地方当局と、また特殊な研究家たちとの間の問題だけにはとどまらない》、《広く全般に亘る一種の文化問題》(36頁)だと論じていた。前後して、沖縄方言論争の火付け役・柳宗悦は「地方性の文化的価値」(『文芸春秋』昭15・6)を発表し、《都市の生活が進むにつれて、同時に地方性の価値が認知されねばならぬ》と主張し、《なぜなら地方は文化価値の豊富なる蔵庫》(207頁)だとその論拠を示していた。

この時期の特集「地方文学の検討」(『早稲田文学』昭15・7)は、無署名「編輯後記」に「日支事変以来、文化方面にも地方主義が重要視され、問題となつてきた昨今、本号は地方文学の検討を行つた」(170頁)と紹介された。青柳優は「地方文学の特性」において、《地方文学が各地に起りつゝある》理由を《中央集権的な東京文学の弊害や、欠陥》に対する《一種の輸血作用》(7頁)と捉え、《地方文学を盛んにしたのは、今度の戦争》(8頁)だと指摘した。また、地方文学として満洲文学、朝鮮文学、九州文学、東北文学、北海道樺太文学、台湾文学をあげる青柳は、それらを内地の《中央文学に対してたゞ地域的に離れた処に在る文学》と、外地の《文学の言語から性格まで中央文学と相違する文学》(9頁)の2つに分類し、さらに《地方文学は素材派文学の持つ一応の強味と結局の弱点とを同じく持つてゐる》(10頁)とその課題を指摘していた⁽¹²⁾。もっとも、仮に地方がモチーフにとどまるとしても、寺神戸誠一が「農民文学断想」でいうように、《いつ如何なる場合に於いてもその国の一つの生産部面を背負つて立つてゐる農民が、その国の如何なる社会関係の中におかれてゐるかといふことの関連に於いて描かれてゐない以上、その農民小説は農民小説として第一義的なものとは言へない》(13頁)として、逆説的に掲げられた理想的な農民文学ならば、素材主義の弊を免れる。市川爲雄も「地方文学の地盤」において、《最近、地方文学乃至地方文化等の問題が取上げられてゐる》ことにふれて、《何か必然的に求めなければならなくなつたといふ或種の僭勢力と、同時にそれに沿つて動いてゐるジャーナリズムの動向》を《看取》している。また、市川は朝鮮文学、満洲文学、台湾文学を例示しながら、《各々がその地理的世界を守り、そこに根を張り、何物かを生み出さうとする機運》を見出す一方、《今日の地方的な文化や文学に対する人々の関心、論議等》については、《都会的文壇小説に飽きて、素朴な地方的作品、若しくは地方的なものへと、人々の嗜好が移りつゝある》(14頁)と捉え、《地方文学の地盤としての「地方」は、混沌としてゐるだけに、古さと新しさ、若しくは貧富などといふ点に於て、人生の機微に触れる要素を持つてゐるし、本格的文学へのよき土壌となり得る契機がある》(16頁)とその可能性を示していた。こうした期待を、広い視野から論じたのが江間道助「新地方文学」である。《「新地方文学」とは、未だ十分に融合しない幾つかの民族が、共同の建設事業にあたる所に生れ出る》と定義する江間は、地方=外地という理解から、《朝鮮又は台湾に於ても、朝鮮人なり台湾人なりの地位が全体的に向上し、且つ彼等が日本人との共同建設者たるの自信を持つやうになれば、即ち彼等が日本人をも亦自らの読者に予想して書くやうになれば、勿論かかる新らしき地方文学は美しく咲くであらう》(20頁)と述べた。

同月の「朝鮮文学特輯」(『文芸』昭15・7)には、創作として金史良「草探し」、兪鎮午「夏」、李孝石「ほのかな光」、張赫宙「欲心疑心」が並び、無署名「編輯後記」には《四篇とも日本語で直接に書き下ろされたもの》で、《このことはいま特に大きい意味を持つてゐる》(248頁)と付記された。同誌同号には日向伸夫「満洲文学通信」、李石薫「朝鮮文学通信」、張赫宙「寸感二つ」、林房雄「朝鮮の精神」、林和「現代朝鮮文学の環境」、白鐵「朝鮮の作家と批評家」といったエッセイ・評論も並び、宮本百合子「文学と地方性」も掲載された。同論で宮本は、既出の中村武羅夫の議論を《文学の豊饒への

道》(157 頁)だと評価し、《文学の将来性への希望として真面目にみられるものならば、地方分散の問題は、日本の文化のありようの多面な立体的な諸角度から着実に追求され、究明され、客観的な自身の歴史の意味をも思ひひそめて、自他ともに扱ふべきもの》(158 頁)だと位置づけ、地方文学の重要性を強調した。

また、《農村文化を先づ地方文化、郷土文化として考へる》という「農村文化のために」(『文芸春秋』昭 15・10)の島木健作は、《地方文化は、一国の文化を形づくる源泉にならねばならぬ》、《地方文化の土台の上に立つ中央の文化が一国の文化といはれるものでなければならぬ》と理想を語るが、《今日の日本にさういふ地方文化はない》(190 頁)ともいう。だとしても、上泉秀信が「地方文化運動の志向」(『公論』昭 15・11)で喧伝するように、《近頃地方文化の運動が目醒しい活況を呈して来た》のは確かである。ただし、上泉は《元来、地方文化運動などといふものは、地方から自発的に盛りあがつて来るのが望ましい》、《だが地方の実状はそこまで達してゐないので、中央から地方へ働きかける姿勢をとつてゐる》ことを認めつつも、《中央の地方文化運動者たち》には、《地方の実状にびつたりと足をつけて発足すること》(15 頁)を希望していた。

この時期、『文学界』は文学者の故郷をモチーフとしたエッセイを特集していく。しかも、河上徹太郎「文学界後記」(『文学界』昭 15・11)に《紀元二千六百年を称へるため、同人の文学的能力を総動員して、「日本を讃へる」特輯を企てたい》、《本号から逐次そのプランに属する特殊研究やオマージュを採録する》(240 頁)という一節が読まれる以上、それは皇紀二六〇〇年を言祝ぐ言説の一翼を担っていく。第一弾「故郷の美しさを語る」(同前)には、芹澤光治良「故郷」、上田廣「千葉」、井伏鱒二「郷土大概記」、亀井勝一郎「津軽海峡」の 5 作品、表紙に「日本を讃へる号」と掲げられた第二弾「故郷の風土を語る」(『文学界』昭 15・12)には、中山義秀「みちのく」、井伏鱒二「郷土大概記(二)」、島木健作「札幌」、河上徹太郎「海から見た故郷〔岩国〕」の 4 作品が並んだ。

総じて、伝統的な日本文化が再評価されていく昭和 15 年には、西洋化された都会文化への批判と連動して、内地の周辺部と外地の日本とをあわせて地方と捉え、それらの多様な地方文化こそが、そこに保存された日本文化のエッセンスを活性化し、再編成していく鍵だと位置づける言説が増加していった。

IV

昭和 16 年、地方文化(運動)をめぐる言説は大政翼賛会文化部の創設によって新たな段階に入る。その端緒となったマニフェストとその概要は、次に引く先行研究にまとめられている。

文化部の基本的地方文化政策は一九四一年一月に発表された「地方文化建設の理念と方針」である。それは、いまや「高度国防国家完成の不可欠な要件」として「文化機構の再編成」が要請されており、「新しい時代の文化を創造する維新」にあること、日本文化の「正しき伝統」は外来文化の影響下に発達した「中央文化」よりも、「地方文化」の中にあり、その発達なくしては「新しき国民文化」は樹立できないこと、を根本理念として、地方文化振興の目標に①郷土の伝統と地方の特殊性の尊重、②郷土愛と公共精神の高揚、集団主義文化の発揚、地域的生活協同体の確立、③中央文化の健全なる発達と地方文化の充実、均衡ある文化の発展、などをかけていた。地方制度や国土計画の改革、「東亜文化新建設の基盤」としての地方文化の位置も論じられており、文化政策にかけられる岸田文化部の意気込みがうかがえる。⁽¹³⁾

以下、大政翼賛会文化部が主導した地方文化(運動)言説を検討していく⁽¹⁴⁾。当時、岸田と並んで文化論を発信しつづけたのは、大政翼賛会文化部副部長の上泉である。その上泉は「地方文化①まづ力

を養ふこと」(『朝日新聞』昭16・2・13)において、地方文化運動の隆盛を確認しつつも、《おほかたは中央からの指図を待たうとする気構へ》であることを問題視し、《地方の立場で従来の中央文化を再吟味、再検討する》(5面)ことの必要性を説いた。また、つづく「地方文化④文化意識の昂揚へ」(『朝日新聞』昭16・2・16)において上泉は、《国民各層の文化意識を昂揚して、地方性を地盤とする文化を振興し、これを新国民文化の建設に発展させたい》という国家レベルの目標と、《あくまでも地方生活の水準を文化的に高めること》(5面)という身近な目標とを、国民の文化意識を軸として一挙に提示する。上泉は「国民文化と地方文化」(『公論』昭16・6)でも、地方文化を《新国民文化建設の、謂はゞ全国運動といふ風に見做したい》(171頁)と言明していた。しかも上泉は《日本民族の正しい伝統といふものが、文化の中央性よりも、却つて地方性のなかに保持されてをることは、今日極めて注目に価する》(172頁)と地方の価値を重視した上で、岸田國士「世界的文化の母胎」(『朝日新聞』昭15・10・20)に重ねるようにして、《世界文化の母胎たり得る日本文化の創造》のために《段階を踏んで》、地方文化－国民文化から《広域東亜文化へと進展》(178頁)していくルートを提示し、世界文化への回路も確保していく⁽¹⁵⁾。

こうした大政翼賛会文化部からの発信に対しては、地方からの応答－報告も言説化されていく。『読売新聞』はシリーズ記事「地方の文化翼賛」を掲げ、佐久間勝「特殊地帯への即応 神奈川県」(昭16・2・21夕)、富木友治「文化の敵エキゾチズム 秋田県」(昭16・2・22夕)、土山喜一「新政治文化の性格 姫路市」(昭16・2・23夕)、黒田静男「総体的生活の醇化 九州七県」(昭16・2・25夕)、後藤勝一「文化能力の発見 栃木県」(昭16・2・28夕)、松田甚次郎「東北六県との協力 山形県」(昭16・3・5夕)、野口二郎「実生活に即して 山梨県」(昭16・3・6夕)、鍋島豊朔「横の連携・縦の推進 富山県」(昭16・3・7夕)を連載した。また、各地の文化活動を紹介する「萌える“地方文化” 土と生産に続々根を張る」(『朝日新聞』昭16・3・14夕)では、リード文に《新しき文化の芽がもえ出でつゝある、土と生産にしっかりと根を下した文化が……この芽を今「地方文化」と名付けてゐるが、都市中心のいはゆる「中央文化」が近代的資本主義に毒され商品化してゐる時、これこそ明日の国民文化の母胎となるものであらう》(3面)と書かれていた。さらに、武市健人「地方的教養の地盤」(『新文化』昭16・7)になると、《郷土／地方》という標語とその含意の差異が次のように論及されていた。

現在いはれてゐる郷土文化の強調が、極めて一方的な郷土性の発揚を狙ふ、全く懐古的なものであるのに対して、その呼び方をとらずに、地方文化と呼ばれることそのことが、中央文化への対立と同時に、展望性を持たさうとするからであり、中央文化への対立に於いてそれを顧慮し摂取することを意味するからであらう。(8頁)

こうした地方文化論が広まっていく中、帰還兵にして、九州文化を担っていくことになる火野葦平は「北九州文化連盟について」(『文芸春秋』昭16・6)を書き、《最近、ひとつの顕著な傾向として、地方に於ける文化運動のうごきがみられる》(162頁)という観察を示す。その上で、地方文化組織独自の「宣言」を掲げる火野は、《支那事変を契機として、澎湃として巻き起こつた国民運動の波のなかに、いまや、国民は一人残らず立ちあがるべき》だという前提から、《新しき日本文化の確立と発展との茫洋たる大勢の一環として、我々地方文化人は、地方文化の擁護と建設とのために起つた》(167頁)、《北九州文化を守ることは九州文化を守ることであり、日本文化を守ることに外ならない》(172頁)と言明し、大政翼賛会文化部の方針にも共鳴していった。ほかにも、地方文学に関しては池島重信が、「地方文学と地方文化③自己革新の要」(『朝日新聞』昭16・6・29)において、《地方文学が(一)生産文学として(二)伝統的精神として充実するところに、来るべき新文化の創造に寄与する面がある》とした上で、《新しい地方文学運動はつねにその母胎たる当該地方文化運動の一翼として推進され、他の

領域における文化活動と有機的な、かつ弾力性ある関係を失ってはならない》という《条件》(4面)を示していた。

前年から地方文化に注目してきた中村武羅夫は「地方文化の再建問題と一つの提案」(『新潮』昭16・8)を發表し、《文学の中央集権制度が次第に崩壊の兆を見せて、地方性が尊重され、たとへば朝鮮文学だとか、台湾文学だとか、九州文学だとか、北方文学だとか、その他地方文学の建設が健実な成長の過程を見せつつある時、一方では地方文化の再建問題が、なかなか熾烈な勢ひで盛り上つて来てゐる》現象にふれて、《根本は一つ》(29頁)——地方という概念が孕む具体的な地域を内地／外地の二種に分節した上で、いずれもが日本を構成する重要な地域であることを根拠として同一視する——だと捉えている。さらに、中村は地方文化が隆盛をみつつある現況の原因として、次の分析を示している。

地方文化の再建問題の盛り上りについては、古くは柳宗悦氏を主とする地方民芸の研究とか開発運動だとか、それから柳田國男氏などの土俗研究、つまり日本各地の風土や、伝説や、行事や、言語や、風俗や、伝統の研究などに端を発してゐるのだと思ふ。それが最近次第に興隆してきたところの日本主義や、日本的なものの研究と、日本精神の興揚といふやうなことで、大政翼賛会の文化運動や、ちやうど大政翼賛会の誕生と、殆んど時を同じうして生れたところの農山漁村文化協会の活動などと相結び、お互ひに刺戟され合つて、その結果が斯くは燎原の火のごとき勢ひを以て、地方文化再建問題が、中央と言はず地方と言はず、すべての文化人たちの心を惹くと同時に、その情熱を高めさせたのだと思ふ。(29～30頁)

その上で中村は、《中央文化と地方文化とは相交流し、相互に刺激し、影響し合つて生き生きと発展してゆく在り方こそ、最も望ましい状態》(34頁)だと、その理想を示した。

前後して、酒井三郎は「地方文化運動の目標」(『文芸春秋』昭16・8)を書く。酒井は、大政翼賛会文化部が《最も重点をおく問題として地方文化の問題を採上げ》てから半年、《地方文化運動はいま全国的に高まつてきてゐる》と総評した上で、《地方文化の中にある、優れた、健康な日本の正しい伝統に基いて、そこから新しい東亜の成立にふさはしい国民文化を建設して行かうとする運動こそ、地方文化運動》(68頁)だと再定義した。なお、酒井は「地方文化運動の動向」(『教育』昭16・8)でも、《地方文化運動》は《日本文化の再建運動》であり、《単なる従来の意味に於ける農村文化運動乃至は郷土文化運動のやうな、狭い立場に止まるものではない》(13頁)と、位置づけていた。

なお、同論が掲載された雑誌『教育』は、無署名「編輯後記」(昭16・8)に《地方文化の振興を要望する声高き折から、これを広い教育の観点から吟味し、国民教育者の活動舞台として具体化してみようといふ企画で、本号をまとめた》(頁表記なし)とある通り、実質的には地方文化特集である。櫻井武雄は「新農村の建設と地方文化」で、中央文化人よりも《直接生産人のなかに、新しい地方文化建設の担ひ手を見出し、育成してゆくことに、多くの期待をかけたい》(28頁)と述べていたし、結城哀草果は「農民の文化生活」で《無論日本国民の健全性は地方人殊に農民に多く保存されてはゐるが、また一方日本国民の悪性をも農民自身がいちばんよく知つてゐる》(30頁)という現状を認めた上で、《文化生活の実行は、まづ精神文化の土台を培つた上にしなければならぬ》(34頁)と論じていた。また、「『地方文化の振興』座談会」に出席した羽仁説子は、《やはり文化といふものは、農村自身から出て来るものでなければ文化でない》(54頁)と発言していた。つまり、地方文化運動の隆盛期にもなお、中央／地方双方の認識・思惑には、言説上でも乖離があったことが確認できる。

もちろん、地方の実情も折々言説化されていた。島木健作は「地方の表情」(『中央公論』昭16・1)で、大政翼賛会に関する誹謗中傷——《翼賛会が赤であるといふ声があるとか、資本の圧迫にうろろうしてゐる指導者のこととか》(347頁)を《奥羽線の夜行》で聞いたと報告していた。また、大瀧重直

は「地方文化の創造」(『国民思想』昭16・1)において、《地方生活者は、いま、都会への服従癖を訂さぬばならぬ》、《文化人としてのプライドをもった生き方を、地方生活者こそたねばならぬ》(79頁)と、地方生活者の意識改革を訴えていた。さらに、無署名「風塵録」(『読売新聞』昭16・7・12)では、《翼賛会は政治力を有しない上に地方には根強いボスの勢力の残滓的抵抗が予想されるからこの際地方文化向上の為に一段の努力を望む》(2面)という希望が表明され、地方文化運動を進める際の困難が指摘されていた。裏返せば、地方に内在する問題も少なくなかったということである。

地方文化論が隆盛をみる中、この年、地方文学を主題とした雑誌特集が3つ組まれた。

その第一は、特集「地方文学の文化的使命」(『新文化』昭16・8)である。編集部による特集のリード文には、次のようにある。

＊今日までの日本文化観は、あまりにも都市乃至は中央の文化形態に対してのみ集中されてゐた。そしてこれは、中央でなければ文化が発達しないといふ偏見さへも生ぜしめた。しかし実際に於いて文化的伝統といふものは、中央よりもむしろ地方のうちに根強く保たれてゐる。〔略〕かかる意味から、地方文学が地方文化にいかなる役割をもつか、また地方文学は、それ自体として強力に生長し得るか、等が我々の当面の課題となつてきた。(54頁)

ここには、“伝統的な日本文化は地方にこそ宿る”という発想が示され、早川三代治「建設的北海道文学」、山田牙城「活潑な九州文化」、張文環「台湾文学の自己批判」、韓植「朝鮮文学と東洋的課題」、大内隆雄「満洲文学の独自性」の各論では、地方文学に期待される文化的貢献が論じられ、他地方の文化との連繋・協和を通じて日本文学－東洋文学を高めることが志向されていた。逆にいえば日本文学・文化へ寄与する回路を擁することで、地方文学はその存在意義を言説上で担保していく。

第二は、特集「日本の周辺をゆく」(『文芸』昭16・9)である。特集のラインナップは、丹羽文雄「北海道」、寒川光太郎「樺太」、津久井龍雄「朝鮮の印象」、春山行夫「台湾への旅行」、水原吉郎「択捉島の問題」だが、同誌同号には石川達三・小松清・高見順「座談会 南方旅行」も掲載されており、無署名「編輯後記」には次の一節が読まれる。

★事変以後、日本の文学者が国境の外に出かけてゆくものの数が非常に多くなつた。満洲、蒙古、支那、仏印、泰、蘭印と、その足跡は所謂大東亜共栄圏のあらゆる部分に及んでゐる。またその見聞はだんだん消化されて国民の経験となり、最近日本の地理的視野は急速に拡りつつある。〔略〕これらの経験が積み重ねられていつたものは、やがて今後の日本文化に測りしれない影響を及ぼすだらうと思はれる。(176頁)

直接は、大東亜共栄圏－南方を想定したと思われる上の一節だが、これらの地域は地方文化・文学として再発見されることで、改めて帝国日本に包摂されていく。別言すれば、日本の外部(東アジア・南方)と日本の内部(周辺部)とを(再)発見して領土化していく言説の力学が駆動している。

第三は、実作を並べた特集「地方派小説」(『文芸』昭16・11)で、同誌同号の無署名「編輯日録」には、次の一節が読まれる。

▼本号は、かねてよりの企画であつた地方派小説特輯として、北海道、中部地方、九州地方、台湾、朝鮮、満洲の各地を、それぞれ背景とした作品をもつて飾ることが出来た。それに、池島重信氏の「地方文化の出路」を以てした。やうやく地方文化が重要な問題として取上げられてゐる時に、かかる企てが何らかの役割を果すことが出来ればとおもつてゐる。(156頁)

同誌のラインナップは、石原文雄「土俗（中部）」、西川満「元宵記（台湾）」、船山馨「旅の果（北海道）」、荒木精之「故園記（九州）」、日向伸夫「寒駅（満洲）」、金史良「嫁（朝鮮）」というものである。

なお、特集外ながら池島重信は「地方文化の出路」（同前）で、『地方文化振興の問題』に関して、『現在、国力の重要な基底の一つとなつてゐる地方就中農村の健全な文化を都会就中東京の多少とも頽廃性を帯びた文化から如何にして擁護すべきか』と『過去の幾久しい過程を通じて、文化といへば都市の文化とされた中央集権的傾向から離れて、地方の独自の文化を如何にして樹立すべきか』（13頁）という課題を同時に検討する必要性を説いていた。こうした見方からすれば、特集「地方派小説」の実作六編は、いずれも地方をモチーフとしてそれぞれの地方らしさを書きこんだ、地方文学の実践といえる。

この特集「地方派小説」は、翌月、無署名「新潮評論 地方派の文学」（『新潮』昭16・12）で論及される。同論では、『いままでのやうに徹頭徹尾中央に依拠するといつたふうの文学の性格は、今度の事変を契機として多少かはつて来るのではないか』という予感の顕れとして上の特集を位置づけ、『北海道、中部、九州、台湾、朝鮮、満洲の六地方に関係のある六人の作家を動員して、それぞれの地方に取材する小説を書かせてゐる』（6頁）と紹介する。その上で、同論では『地方地方によつて関係に濃淡の差はあるが、さういふ各地方との関連性に於て自分の地方を見るといふ建前からめいめいの地方文学を生長させて行くことこそ望ましい』（7頁）と、『地方派の文学』への『期待』を示していた。

こうした一連の地方文学を主題とした言説に通底しているのは、第一に中央・都会偏重だった文学に対する、地方にこそ伝統（日本らしさ）が宿る、あるいは多様性がある、といった地方文化の再評価、第二に具体的に内地の周辺部である北海道（樺太・択捉）、九州、外地としては台湾、朝鮮、満洲を重要な日本の一部として繰った特集「地方文化確立の基柢」（『文化日本』昭16・10）もある。同特集に「地方文化振興の意義」をよせた岸田國士は、次のように述べる。

今日、日本が目指してゐる高度国防国家建設とは、兵備そのものを第一義とする侵略的武装国家を理想とするものでは決してない。あくまでも道義的な国家目的を達成するに当つて、己むを得ず排除すべき障碍を予想しての軍備と、いはゆる東亜共栄圏を確立するための経済的基礎と、後進諸民族指導の実権を他に譲らないだけのすぐれた文化的能力とを完全に蓄積することにほかならぬ。〔略〕地方文化運動とは、かゝる日本文化の興隆運動なのであつて、従来のごとき単なる農村文化運動に止まるものでは決してないのである。（15頁）

同特集はほかに、柳田國男「文化政策といふこと——東北文化のために——」、北野博美「祭礼・行事について」、早川孝太郎「所謂郷土舞踊について」、町田嘉章「民謡とその郷土的な性格」、村岡景夫「地方文化と民芸」、今泉忠義「方言と標準語」、飯塚友一郎「地方文化と演劇」、園池公功「地方文化と芸能について」が並び、地方文化が各ジャンルの専門家によって論じられる。文学に関しては田中稻城「文化運動としての地方文学」がある。同論で田中は、『文学が文化運動の一翼としての自覚を持ち始めたことは、現代文学史に於て特筆すべき』（63頁）だと捉えた上で、『地方文学といふものが本当に育つ為には、心から郷土を愛しその文化の発展と向上とを願ふ作家達が、その土地にしっかりと生活の根を下して初めてなされる』（64頁）という考えを示し、『既成文学及び中央文壇の現状に対する飽足りなさ、地方の作家達に深い反省と自発とを与へ』、『同人雑誌その他による地方文学運動』に『実質的な歩み』（65頁）をもたらしたとみている。諸家「地方文化運動当面の課題（回答）」では、地方文化運動を牽引する16名からよせられた地方文化振興に際しての課題・希望・意見などが示されていた。

総じてこの特集では、無署名「編輯後記」に『地方文化の確立とは、やがて国民文化の確立であり、それは確固たる世界観の確立によつて、我々の直面せる東亜再建の理想と闘ひに、我々の精神を壮大なるひとつの流として動員すること』（頁表記なし）と言表された通り、『東亜再建』を遠望しながら、地

方文化運動を通して国民文化を高めていく実践へと国民の《精神》を動員することが企図されていた。

もちろん、前後する時期には特集以外の地方文化論も多い。浅野晃は「地方文化と地方文学」（『公論』昭16・8）において、《都市文化に対して特に地方文化が重視されるのは、丁度今日わが国の古来の精神を護持してあるものが謂はゆる文化人でなく却つて草莽の庶民であるやうに、都市文化の猥雑鈍感から固有の斯の道を護持するものこそ地方文化でなければならぬから》（312頁）だと断じ、都市－中央の悪影響を被っていない地方文化・文学を《わが国古来の精神》を根拠として《重視》（319頁）していく。他方、結城哀草果は「郷土の遺産について」（『文芸春秋』昭16・8）において、《一地方の文化建設を本気になつて目論む者は、必ずその地方の文化史の上に立たなければならぬ》（213頁）と述べて《地方の文化史》を重視しつつも、《今や近代文化に向つて促進すべき農民に、往年の太平の夢の名残のある民芸品等に対する興味を誘導するごときは、地方人の文化に邁進せんとする健康な積極性を去勢するものであつて、それは時勢を知らぬ者共の観念的運動》（217頁）だと、中央文化人への苦言を呈していた。

それでも、地方文化が国家・国民にとって重要であるという認識は、折々言説化されていく。中島健蔵は「地方文化運動管見」（『中央公論』昭16・11）において、《支那事變の進展によつて、何人の目にも明かとなつたこと》として《国家の総力を、根本的に再編成して、大きな力を生まなければならぬといふ現実的な必要》（186頁）をあげ、それゆえ《地方文化問題は、既成の文化の持ち込みでは足りず、当然新文化の創造といふ道に突き進むほかない》（187頁）という指針を示す。同月には、「地方文化推進のために——手記二篇——」（『文芸春秋』昭16・11）もある。荒木精之は「『みたみわれ』意識の昂揚」において、《われわれが父祖の長い間の文化の歴史、伝統を正しく継承し、それを発展させねばならぬといふのは、それが国民生活を強大にし、豊富にし、国民精神を強化し、昂揚させるから》（148～149頁）だと述べて、地方の声を示す。他方、及川晃は「実践途上の諸条件」において、《真摯な文化運動を阻害したものは、文化の字義を知らぬ大衆の側にはなくして、却つて、煩瑣な字義談義にかゝづらふ「肩書」のある知識人に多い》と、まずは中央の文化人を批判する。また、返す刀で及川は《地方文化運動における第一義的な条件は地方々々の複雑な人事関係》だと指摘した上で、《そこには政治的对立を初め、利己的な位置の争奪、党派関係、主義の相違、感情問題等等、錯綜した人間のもつれがあるを常とする》（153頁）と述べ、地方内部においても人事に関連した障碍が常態化しているさまを暴露していた。

以上を総じて、昭和16年に産出された言表によって地方文化（運動）言説の論点はほぼ出揃つたとみてよい。プロレタリア文学の変奏としての農民文学・地方主義文学はその存在感を弱め、言説上では大政翼賛会文化部が主導する地方文化（運動）が支配的となり、内地の周辺部に見出された伝統的文化（日本らしさ）と帝国日本が包摂すべき外地が「地方」という概念に集約されていく——こうした地方文化言説の産出－再編成をへて、国民文化にして大東亜文化でもある帝国日本の文化は形成されていく。

V

昭和16年12月8日の太平洋戦争開戦以後も、地方文化（運動）言説に大きな変化はみられなかった。開戦後、岸田國士が公にした地方文化論に「文化運動への反省——東北文化協議会講演——」（『文学界』昭17・1）がある。岸田は同論で、《文化運動を進める上に於て我々として注意しなければならぬ一つの点は、文化運動に対する無理解な人達に対して、彼等が一概に悪い、間違つてゐるといふ考へ方をする事》（28頁）だと言明する。また、「地方文化の諸問題」（『文化日本』昭17・5）で岸田は、《新しい日本文化を建設するために、それぞれの地方が充分の自信を持つて、今までのやうに中央にのみ何物かを求めるといふ態度を棄て、地方に於て新しい文化を建設するために凡ゆる計画と努力とを

しなければならない》(61頁)と、持論を反復－強調してもいた。こうした反省に連動して、地方文化運動における成果／課題はシリーズ記事「地方文化運動の現況」——結城健三「山形県文化運動の現状と今後の課題」(『文化日本』昭17・1)、阿曾村秀一「秋田県文化運動の現状と今後の課題」(同前、昭17・7)、山田實「青森地方文化運動の現状と今後の課題」(同前、昭17・8)、結城健三「山形県文化運動の現状と今後の課題」(同前、昭17・9)、富木友治「地方文化と学術振興——第二回東北文化協議会に出席して——」(同前、昭18・3)などで示されていった。また、「地方教育と地方文化」(『新文化』昭17・3)で喜久治郎は、《地方文化建設のリイダアは、地方教育者であり、その手足となるものは、生徒、青年》(31頁)であり、《地方教育に職を奉じるものは、よろしく地方文化建設の一尖兵として精進すべき》で、《そこに、教育者として、高度国防国家建設への職域奉公がある》(33頁)と位置づけていた。

こうした人事に関して、岸田國士は「地方文化の諸問題(下)」(『文化日本』昭17・6)において、《農山村あるひは漁村の生活に入つて見ますと、そこには既に恐るべき病根が巢食つてゐる》(33頁)として、《日本人が曾つては持つてゐたところの立派な生活秩序、立派な生活技術、この生活秩序と生活技術を更に裏附ける生活精神、あるひは生活観》を《今日は無くしてゐる》(33～34頁)ことを指摘する。また、「地方文化運動とその実相(5) 独占物に非ず」(『朝日新聞』昭17・11・19)で岸田は、《文化団体の機構、殊に、人的要素といふことが貴重な課題》だと指摘して次のようにつづけていく。

いよ—団体を組織し、その運動を展開する段階にはいつたならば、「始めた」人が誰であれその地方において、実際に指導力をもつた、殊に、知識層の最も信頼する人物が中心の中心に据ゑられなければならない。／さういふ人物がなか—腰をあげないといふ事実はあるかも知れぬ。それを引き張り出すために説得し、自信がないといふのを鼓舞激励するのが「始める」人たちの最も力を尽すべきところである。ただ、かういふ種類の人物が、案外役に立たぬ例はあらう。それならそれで代りを探すか、憚りなくいへば、ロボットの存在とみなせばいいのである。(4面)

こうした岸田の立ち入った言及をみると、やはり地方文化運動が順調に発展しないことへの苛立ちがくすぶっていたと思われる。その岸田は「地方文化運動とその実相(2) 積極的建設」(『朝日新聞』昭17・11・14)において、地方文化運動を《「文化的に恵まれない」といはれる地方生活の再吟味から出発し、特にその生活に、はつきり織り込まれた日本の伝統の正しい把握とわれらの郷土をして戦ふ日本の真の力たらしめんといふ決意とによつて、全国的に高度の国民文化を建設しようといふ運動の提案》(4面)だと改めて定義する。その上で、岸田は「地方文化運動とその実相(4) 誰が始めるか」(『朝日新聞』昭17・11・18)では、《文化運動に関する限り「自分には何もできぬ」と思ふことは絶対に誤りであつて、誰にでも何かはできる》(4面)と断じて、全国民の参加を促していた。

ほかに、太平洋戦争開戦以後には、隣組が地方(郷土)文化という観点からも注目されていく。ここでも岸田國士は「蹶起せよ文化人＝隣組の文化運動＝」(『朝日新聞』昭18・4・13)を書き、《戦時下文化運動の目的は、地域的にはもちろん、生活力の強化になければならぬ》という持論の延長線上で、《隣組なら隣組の家族化、町内会なら町内の郷土化といふ方向に向けられなければならぬ》(4面)という見解を示した。また、岸田は「隣組長として」(『婦人之友』昭18・5)では、《町内会には、消費経済委員会なるものがたしか出来た筈であるから、それと並んで、「生活文化」或は「厚生文化」委員会なるものを当然設けてほしい》という希望を表明していた⁽¹⁶⁾。これをうけた中野好夫は「隣組の郷土化」(『時局雑誌』昭18・6)で、《岸田氏の意見には私も非常に深く感じた》と表明した上で、《まづ現在岸田氏の所謂「隣組郷土化」の実現を困難ならしめる条件を検討することが必要》だという。中野によれば、その条件とは《第一に、そして最大なものは近代都市の馬鹿げた膨脹ぶり》(43頁)、《第二

に、今日いよいよ吏僚化して来る町内会組織に果して郷土化の理想が期待出来るか》であり、《下から盛上る隣組観念が生れるやうになつてはじめて真に郷土化への一步が踏み出されるものではないか》(44 頁)という見通しを示していた。それが果たされれば、たとえ都会であっても隣組を通してそこを郷土化することが可能となり、都会／地方の区別なく日本の全地域が地方文化運動に覆われていく。

地方文化人の立場からは、結城哀草果が「論説 地方文化運動の基底」(『文学報国』昭 18・10・1)において、《苟も地方文化運動を志す者はまづその地域の文化歴史を究明検討して、そこに伝統されたる文化遺産を取上げ、その良きを育て、悪しきを除去しその遺産をして時代的に活すことに気付かなければならぬ》(1 面)と、地方文化の高揚を目指していた。実際、『文学報国』には連載「地方文化の確立方策」があり、山口を扱った村田秀雄「地下水のごとく」(昭 18・11・1)、北海道を扱った小田邦雄「漁村自らの革新——檜山漁村文化協議会報告——」(昭 19・1・1)、富山を扱った橘直治「強靱な戦争魂を——高岡文教の運動概況——」(昭 19・1・10)が掲載されていた。なお、「地方文化の確立方策 富山の巻」(同前)のリード文には、《新しきアジア文化の母胎として、その健康さと生活的な地方文化の高揚こそ、ひとり東亜のみならず、世界文化の歴史に新しき光りを投げかけるであらう》(2 面)といった一節が読まれ、日本文化を核として、地方文化、大東亜文化、世界文化を同心円状に拡張していく地方文化言説との連続性は明らかである。このようにして、地方文化言説は帝国日本各地の国民生活に浸透していく。

昭和 19 年になっても、『文化日本』(昭 19・2)では実質的な地方文化特集が組まれる。梅山一郎は「農村文化進展の道」において、《英米色の濃くない日本文化は農村に残つてゐるといふので、これを見直す気持が台頭してきた》(4 頁)と、地方(農村)が再発見された経緯を都市の指導者批判を交えて振り返った。森忠巳は「地方翼賛文化団体の使命」において、大政翼賛会文化部が主導した地方文化運動について次のように《三年の足跡を回顧》していく。

運動の第一年は地方における知識層が新体制運動の時潮に乗つて自発的に結集せんとした年であり、この時期には多く文化の新しい理念について論議され、文化運動の気運が全国に高まつた。第二年は翼賛会各府県支部機構の整備とともに、このいはゞ自然発生的な運動を翼賛運動の軌道に結びつけるための努力が払はれた時期であり、また翼賛壮年期の成立に伴ひ、それとの活動上の調整が論議され、もつぱら文化団体の組織論が横溢した時期であつた。その間大東亜戦争の勃発によつて運動もとみに現実化され、第三年目はその実践段階に入り、具体的な文化運動の活動内容に主力が注がれ、団体の経費などが問題になつて来た。(9 頁)

その上で森は、《伝統を如何にして現代と発展的に結びつけ、その形骸でなくその生命力を現実には復歸せしめるか》を《今日の文化運動の一課題》(12 頁)だと位置づけ、《戦争が国民の生活を浄化し、誤れる価値を転換せしめ、日本的にして新しい文化の機運を作り出しつゝある》、《このこと自体がすでに広い意味における国民文化の建設》(13 頁)だと論じていた。こうした、地方文化(運動)がより大きな文化を体現していくという議論は、橋浦泰雄「地方文化の意義」(『文化日本』昭 19・2)にもみられる。橋浦は《地方は日本文化の故郷》(22 頁)だと断じた上で、《個々の地方の文化は或時代に波紋を描いたその波頭の一部にしか過ぎぬのであつて、これを資材として広く類型を総合する時に、始めてその波紋の全貌も窺知され、従つて個々の地方文化もそれへに正しき位置を得ることが出来る》と部分-全体の関係を捉え、《我々は日本文化の過去現在に互る正体を具体的に握り、更に世界の諸民族の文化に目を開きつゝ大東亜文化の建設指導に当るべき》(23 頁)だとして、地方-日本の関係を日本文化-大東亜文化の關係に類比的に重ねあわせた。

また、この間の地方文学論にも、従来からの論点の反復が目立つ。朝谷歌三は「文芸時評——郷土文

学に就いて吉田十四雄氏への手紙——」（『新作家』昭17・12）で、《郷土文学の持つ特殊性》を《その土に咲く色異なる美しい花》だと喩え、《郷土文学は素材を異にしながら、土地と花との関係にある如く絶体的な本質を有さねばならぬ》（113頁）と述べて、地方の理想を提示する。また、浅見淵は「新人育成の問題 地方文学確立の機運」（『文学報国』昭19・4・10）において、《出版整備や都市疎開が契機になつて、いまや謂はゆる地方文学が確立せんとする徴が見えるが、地方の同人雑誌の一層の強力化も一方法であらう》（1面）と、地方の同人雑誌に期待をよせている。《日本全国のそれぞれの地域に根をおろし、主調として「地方的」とみられる独自の性格を帯びた文学活動》の《すべて》を《「地方文学」》（10頁）だと定義する「地方文学の曙光」（『文芸春秋』昭19・10）の岸田國士は、《現代の日本に於て、文学者が自己の文学的活動を営む以上に必要なことは、次の時代の文学を正しく大きく育てるための土壤に精いっぱい鋤を入れることだ》という見解を示し、次のようにつづける。

生活と職業が一体でなければならぬ如く、仕事と文学とも亦一体たり得るといふ信念が、そもそも「地方文学」の出発点にはあるのだと思ふ。してみれば、文学に専念するといふ意味を狭く解せず、自分が何か書いて発表したいと云ふ欲求と、さういふ欲求の満されるやうな職場及び日常生活の雰囲気を作る工夫と、更に、さういふ雰囲気が一段力強く土地の文化的発展を促すといふ理想とが、容赦なく慌しい現実の戦時的活動のなかで、常に渾然として融け合ふ生活風景を何人も一度は想像してみるべきである。（12頁）

このように、岸田は職業作家による文学とは異なる、《仕事と文学》が一体化したものを《「地方文学」》として再定義し、さらに《それぞれ地方に先づ、「文学」の確乎たる地盤を作ることの方が大切》で、そのために《「文学」も亦、「地方文化」の一要素であるといふ見地からあらゆる文化部門との協力を惜まず、「地方文化」昂揚のため、「文学」の負ふべき役割を自ら果すことから始めなければならぬ》（15頁）と述べ、文学（者）よりも地方文化の昂揚をその前提として重視していた。

こうして、地方文学よりも地方文化を優先する言説上の序列－優劣は、福田清人「地方の文化運動断面」（『新潮』昭19・8）において、より先鋭化されていく。福田は《従来中央に偏在してゐた文化に対して、地方——正しくは郷土——の文化を発揚させ弾力性を持たせるとなみの意識が強くあつた》（20頁）と、改めて《「地方文化運動」》の意義を示し、《文化団体の人々》には《道義心の昂揚に、さらに逞しい美と力との顕現に、文化運動は、戦力をになふ》ことを希望し、《郷土、地方に疎開された文学者諸兄》には《この地方の組織体の戦列に加つて、その力をかしていただきたい》（22頁）と表明していた。

ここにおいて、地方文化（運動）は端的に《戦力》と位置づけられる。すでに、地方文化（運動）言説は国民文化（運動）、あるいは大東亜文化を牽引すべき日本文化として読み替えられてきたが、昭和19年に至り、言説上において文化と戦争との距離がより近接していったことは確かで、それをさらに加速させたのが地方への疎開である。このことと連動して、本稿Ⅳで検討した時期に比べると、国内における地方文化（運動）を主題とした議論が、地方の立場も含めて細やかに議論された一方、昭和10年代前半まで頻りに論及されていた外地——朝鮮、台湾、満洲が言説化される機会は激減していった。

Ⅵ

太平洋戦争期における米軍機による本土空襲は、昭和19年から始まり、11月頃から本格化する。こうした戦況の悪化に伴い、「国内態勢強化の指向⑤人口疎開の方針明示」（『朝日新聞』昭18・9・28）などで疎開の方針が報じられると、同紙同日には「社説 疎開は攻勢展開たれ」（同前）も掲載され、

そこでは《疎開問題は飽まで消極、防備を趣旨とする》(2面)と位置づけられていた。それが、次第に「社説 勝ち抜くための疎開」(『朝日新聞』昭19・3・24)となり、ついに「社説 戦ひとしての疎開」(『朝日新聞』昭19・12・11)では、《疎開はたとひ消極的であるにせよ、一つの防空戦法であり、敵米英との戦ひである》(1面)と、その意味づけが積極的なものへと転位していった。

事実、無署名「文学者と疎開問題」(『文学報国』昭19・1・20)では、《すでに栄えある応徴によつて、多くの作家、詩人、劇作家等が時局産業に挺身、或は筆管を鉄にかへて故郷に、大陸に帰農転進しつつある》という報告につづき、《帰農と云ひ、疎開と云ひ何れも増産、防空或は地方文化高揚などの連繫に於いて、決戦下の今日緊急事として要請されてゐる》(2面)として、文学者の帰農や疎開に積極的な意味が付与されていった。

こうした状況の変化をうけて、地方在住文化人の声も言説化されていく。秋山六郎兵衛は「文学決戦疎開と文学」(『文芸』昭19・4)で、《現下の情勢から言つて、疎開の緊急を要することは、今更言を要しない》、《特に、他の職業人に比べて、極めて手軽に疎開出来る文学者たちは、情実の如何を顧ることなく他に先んじて疎開すべき》だという見解を示し、《所謂文学することのみが、今日に於ける文学者の使命でないことも、今更言ふまでもない》と断じていた。さらに秋山は、《一度び疎開を決意した以上は、それへの地方に永住して一地方人として生活する決意が先づ肝要》(40頁)だと地方の現状に即して疎開者への要望を示していた。しかも秋山によれば、《永年文学者として修練した思索や感覚を活用するのは、どこまでも一地方人としての職能の場に於て》(41頁)であるべきだという。

個々人の自由な選択とは別に、戦局に伴う環境の変化によって本来の活動が困難になっていく現実の中、文学者には生活への挺身こそが求められていく。結城哀草果「疎開する文学者に」(『文芸春秋』昭19・5)にも、疎開者の要望－希望が読まれる。まず結城は、《若い男のすべては国家の動員にに応じて村を去り、現在田畑を守り耕す者の多くは、女と老人であることをまづ認識しなければならぬ》(26～27頁)と論じ、地方の現状を疎開者に突きつける。その上で結城は、《田舎に疎開して来る文学者が一体どんな心構へが必要か》について、《まづ文学者であることを一応かなぐり捨てて、一個の農民に生れ替ること》、《そしてしばらく沈黙して地方の性格と、民情、風土等をしづかに凝視し勉強理解するに限る》(29頁)と断じる。また、結城は文学者に対して、《今後疎開者と地方民との間に、生活や感情のうへにいくつもの難題が起る》際に、《鋭敏な感覚と温い理解力とをもつて、両者の疎通をはかり円満にゆくやうに仲に立つて努力して貰ひたい》と述べ、さらに次の希望も示していく。

地方民が雄大端麗な自然の中に生活しながらも、その自然美を気付かずにゐることや、勝れた伝統文化が根深く培はれてゐるのに、その恩恵を知らずにゐること等が多いから、疎開文学者はいちはやくそれに気付き、その美しさと恩典とを地方民に教へて貰ひたい。(30頁)

しかし、結城はその結語で《疎開文学者と疎開地との理解が本当に深まつて行くとき、そこに皇国文学の維新の鐘が鳴り渡る》(30頁)と述べ、両者を止揚した先に《皇国文学》を構想していた。

こうした疎開以後における地方文化の方向性は、「都会文化は凋落の花 奥多摩に半農生活の吉川英治氏の疎開談」(『文学報国』昭19・4・20)において吉川英治が語った、《地方の根にあるもの、即ち郷土の文化、それを再び甦らせ、それに力を合せる》、《そこに文化人の郷土に帰つての文化の協力がある》(3面)という発言とも共鳴するものである。特集記事「疎開と地方生活」(『文学報国』昭19・4・20)にも、《疎開は国内戦列からの回避ではなく、より強固な戦闘配置への完備体制でなくてはならぬ》というリード文が掲げられ、阿木翁助「長野 わが疎開生活」、伊藤永之介「秋田 疎開者の心がけ」、鈴木彦次郎「岩手 馬の爪」、榊山潤「福島 此处は将来も生活の根拠」、神戸雄一「宮崎 郷土の精神に帰り咲く」といった各地に疎開した文学者による現地報告記事が並ぶ。

以上、こうした疎開文学者心得とでも称すべき言説において示されたのは、第一に文学者としてではなく一地方人として生きること、第二にしかし地方住民との交流に寄与すること、第三に以上の二点を通じて新しい文学を生み出す努力をすべきだということであった。

大局的な視座からは、中村地平が「文学決戦 文学者と疎開」（『文芸』昭 19・5）において、『文学者の疎開は、同時に文化の疎散といふ積極の面が誘導されて、はじめての意義が生れてくる』と文化の担い手として文学者を位置づけ、『現在の情勢下に於ても、文学者の疎開は、各地方の地方文化の高揚、樹立にいくらかの功献をするであらうし、また功献するところあらねばならぬ』（8 頁）と、その使命を言明していた。中村武羅夫は「既に戦闘配置へ＝総蹶起運動と文学者＝」（『読売報知』昭 19・5・16）において『最近の文報〔文学報国会〕の調査に依れば、作家、詩人、評論家などの有名文学者だけでも、実際に身を以て率先疎開して各地方に分散して行つた人々が、既に五千人を超える数に達してゐる』と報告した上で、文学者の疎開が『決して単なる逃避の意味ではない』、『職場への転身などにしても出版物の減少に依る収入減から来た一時的職業の転換など、考へるべきではない』と消極的な捉え方を排し、『これこそ決戦非常措置に呼応して文学者の自覚に基き、愛国の至情と熱意に盛り上るところの総蹶起の実践』（4 面）だと、文学者の言動を高く評価していた。「文学者の戦力挺身（下）重大なる役割」（『朝日新聞』昭 19・6・7）においても、疎開した文学者として『高田保（大磯）中村地平（宮崎市）吉川英治（都下吉野村）上泉秀信（福島県）長谷健（福岡県）長興善郎（神奈川県小淵村）鈴木彦次郎（盛岡市）榊山潤（福島県）西条八十（茨城県）中村正常（奈良県）阿部知二（姫路市）日比野士朗（宮城県）国枝完二（鶴沼）林芙美子（長野県）小島政二郎、吉屋信子（何れも鎌倉）など』があげられた上で、『地方に行つてはまづ都会風、文士風を吹かさぬこと』、『地方において分に応じた仕事に精根をこめるべき』だとして、『地方文化の育成、地方史伝の調査、その他いろいろな仕事』（4 面）が例示されていた。

こうした時期の興味深い新聞記事として特集「戦力化する地方文化」（『朝日新聞』昭 19・9・27）があり、その急所はタイトルにくわえ、次に引くリード文にもよく示されている。

文化は中央の独占物ではない、支那事変以来「地方」への関心が昂まつてきて特にその感が深い〔略〕熾烈な決戦下の現在、従来のやうな地方文化の復古的な行き方は清算され「文化も戦力」の役割を果たさねばならない時機に到達した。（4 面）

同特集には中津川俊六「北海道 屯田兵魂へ」、渡邊到源「福島 力強い建設工作」、江馬修「飛驒 娯楽を渴望する山村」、大内義直「広島 宗教を中心に底力」、原田種夫「九州 武装して起つ」が並ぶ。同特集内の各論においては、大政翼賛会文化部が主導した地方文化（運動）言説と比して、より直接的に『戦争に貢献』することが望まれ、そうした地方文化（運動）言説が積極的にイデオロギーを担うようになっていく。

以上、本稿では昭和 10 年代における地方文化（運動）言説を分析してきたが、いくつかの契機と時局の変化に即して再編成されてきた言説は、ついに昭和 20 年、文化論でありながら文化が主題－鍵語ではなくなっていく。こうした、日本の内地－地方（疎開先）に照準を絞りつつ、文学よりも文化、文化よりも戦力を重んじる地方文化（運動）言説の不可逆的な動向は、福田清人「論説 地方活動実践の為に」（『文学報国』昭 20・3・10）にきわまる。福田は、『一年半ばかり翼賛会にゐて地方文化運動に携はつた乏しい乍らの経験からの覚書』として同論を書き、『一、既存地元文化団体と連絡を密にすること』、『二、地方活動の場合、文学者は文化運動を狭義に解せぬやうにしたきものなり』と、大政翼賛会文化部の方針とも重なる持論をまずは提示する。注目されるのは、次に引く後続の論点である。

三、文報〔文学報国会〕事務当局に望むことは敵が沖縄に迫り、この走り書を記してゐる時にも空襲警報発令せられ、今にも爆弾の雨ふらんとする時なることを深く考へられる、なんでも、今は、少しでも戦力に役立つことは即刻、そしてすぐ手につくところからやり初めてもらひたき事なり。〔略〕／四、地方の会員も組織や何か後でいゝから自分の住んでゐる町村、隣組から——それが、本当の日本の一番基礎をなす地盤であるので、そこからたとへ文化運動など銘うたずとも、手をつけるべきだと思ふ。〔略〕／五、最後に根本的な事だが空襲等で東京では活動がやりにくくなつた、地方に会員が多く疎開したから地方活動をやるといふ考へ方がありとすればそれは根本的に間違つてゐるといふことを附記する。(1面)

福田はここで理念、組織、方法などのすべてを放擲して、我武者羅に身の回りでできる何かしらを、各自ですぐさま実践すべきだ、と述べていることになる。つまり、上の一文は、敵襲の迫る中、とにかく建設的な生活を鼓舞する精神論のほかではない。してみれば、昭和10年代に蓄積されてきた地方文化(運動)言説は、ここにおいて蒸発してしまっている。残されたのは、地方という場所と疎開者も含めた地方に住む国民、そして地方での意識的な文化生活が戦争の役に立つという空虚な理念だけである。これこそが、昭和10年代における地方文化(運動)言説の、帰結-終着点である。

総じて、時局に応じてその含意を変じてきた昭和10年代における地方文化(運動)言説は、太平洋戦争開戦以後にその含意を急速に萎ませ、疎開が推奨される頃には、岸田が提唱した生活との一体化を目指す文化論は皮肉なかたちで実現をみる。かつて東京で活動していた文化人・文学者たちは地方に疎開して一地方人として生きていくことが至上命題とされ、以降、戦争の遂行に向けて生活のすべてを——それらを「文化」と称して対象化する契機も失い——戦力化していこうとする言説だけが残されていく。

注

- (1) 赤澤史朗「太平洋戦争下の社会」(藤原彰・今井清一編『十五年戦争史3』青木書店、平1)における《地方翼賛文化運動の一部には、戦時下の日本主義に部分的に抵抗しつつ、戦後の地方文化運動へ繋がっていく場合もあった》(172~173頁)、北河賢三「文化運動の昂揚」(『戦後の出発 文化運動・青年団・戦争未亡人』青木書店、平12)における《文化運動は戦時中に途絶えたのではなく、翼賛運動の一翼として推進されたのであるから、戦後の文化運動を検討する際には戦時期の文化運動との関係に注意を払う必要がある》(24~25頁)といった指摘を参照のこと。
- (2) 北河賢三「地方文化運動」(吉田裕・森武磨・伊香俊哉・高岡裕之編『アジア・太平洋戦争辞典』吉川弘文館、平27)、410頁。
- (3) 赤澤史朗「戦中・戦後のイデオロギーと文化」(『戦中・戦後文化論——転換期日本の文化統合』法律文化社、令2)、267頁。
- (4) 北河賢三「戦時下の地方文化運動——北方文化連盟を中心に——」(赤澤史朗・北河賢三編『文化とファシズム』日本経済評論社、平5)、238頁。
- (5) 北河賢三「解説」(北河賢三編『資料集 総力戦と文化第1巻 大政翼賛会文化部と翼賛文化運動』大月書店、平12)、502頁。
- (6) 大蔵真由美「戦時期農村文化運動の実態に関する研究——社団法人農山漁村文化協会の文化施設実験の取り組み——」(『松本大学研究紀要』令2・3)、高橋秀太郎・森岡卓司編『一九四〇年代の「東北」表象 文学・文化運動・地方雑誌』(東北大学出版会、平30)、若松伸哉「孤獨^{アインザーム}な交友」——太宰治『惜別』と地方文化運動——(『日本近代文学』令3・5)ほか参照。
- (7) 用語に関して、本稿では「地方」を中心に考えるが、地方文化(運動)を主題としている限りにおいて、「故郷」、「郷土」、「風土」などを掲げた言表も検討対象とする。
- (8) 昭和10年前後の西洋文化の位置に関して、拙論「昭和一〇年前後・世界化する〈文化〉——文化擁護国際作家会議／知的協力国際会議」(『人文研究』令2・3)参照。

- (9) 立岡裕士「公的図書館における新風土記叢書の所蔵状況：新風土記叢書の普及について考えるために」(『鳴門教育大学研究紀要』平 27・3) ほか参照。
- (10) 谷川健一編『叢書わが沖繩 第二巻』(木耳社, 昭 45), 拙論「岸田國士の大政翼賛会文化部長就任をめぐる言説」(『立教大学日本文学』平 30・1) ほか参照。
- (11) 拙論「帰還兵言説のなかの火野葦平「美しき地図」」(『立教大学日本文学』令 3・7) 参照。
- (12) 拙論「富澤有為男『東洋』の場所——素材派・芸術派論争をめぐる」(『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』立教大学出版会, 平 27) 参照。
- (13) 河西英通「翼賛運動と地方文化」(馬原鉄男・掛谷幸平編『近代天皇制国家の社会統合』文理閣, 平 3), 182 頁。あわせて, 北河賢三編『資料集・総力戦と文化 1 大政翼賛会文化部と翼賛文化運動』(大月書店, 平 12) も参照。
- (14) 岸田國士の文化論については, 拙論「昭和 10 年代における〈文化〉論: I ——大政翼賛会文化部長・岸田國士の発言を中心に」(『湘南フォーラム』平 31・3) 参照。
- (15) 拙論「昭和 10 年代における〈文化〉論: II ——日本文化／大東亜文化／世界文化」(『湘南フォーラム』令 2・3) 参照。
- (16) 岸田國士には, 戦時下の隣組をモチーフとした新聞連載小説「荒天吉日」(『中部日本新聞』昭 19・3・18～8・31) がある。拙論「戦時下の岸田國士・序説——「荒天吉日」を手がかりに」(日本近代演劇史研究会編『岸田國士の世界』翰林書房, 平 22) 参照。

※本研究は JSPS 科研費 JP20K00323 の助成を受けたものです。

Discourse on the local cultural movement in the second decade of the Showa period (1935–1944)

—Focusing on literary discourse

MATSUMOTO, Katsuya

Abstract

In this paper, I have analyzed the discourse on the local cultural movement in the second decade of the Showa period (1935–1944). In Chapter 2, I confirmed the ways in which the concept of “local (culture)” was attracting attention through provincialist literature and literary discourse about hometowns and hometowns. Chapter 3 examines the discourse on local culture that developed in conjunction with the reevaluation of Japanese cultural theory in 1940, focusing on the reemergence of local literature. During this period, the term “region” included both the periphery of the interior (Hokkaido, Tohoku, Kyushu, etc.) and the exterior of Japan (Manchuria, Korea, Taiwan, etc.). In Chapter 4, I focused on the local cultural movement led by Imperial Rule Assistance Association (1940–1945), and analyzed the statements of the members of the Cultural Department and their acceptance in the provinces. I also pointed out that the discourse on local culture during this period formed a circuit that connected local culture as national culture to “Greater East Asian culture” and “world culture”. In chapters 4 and 5, which deal with the aftermath of the outbreak of the Pacific War, I examined how local culture was positioned as a “war power” in the discourse.

Key words : local cultural movement, local literature, Imperial Rule Assistance Association (1940–1945), evacuation, Kunio Kishida